

🏠 SERIES / 創造の現場から

菅木志雄のアトリエを訪ねて。「日常のなかに、アートへ転換できる動作、行為、状態はいくらでもある」

アーティストは日頃どんな場で、どのように創造をしているのか。アトリエを訪ねて、その場で尋ねてみたい。あなたはどのようにしてこんなところで、そんなことをしているのですか？と。今回赴いたのは、半世紀にわたり現代美術の最前線を歩き続ける、菅木志雄さんの創造の現場である。

文=山内宏泰

2022.2.6

🔖 保存



菅木志雄



大きい画像で見る

静岡県伊東市の温泉街から、伊豆の山中へと車で分け入っていくことしばし。民家もまばらになってきたあたりに、菅木志雄さんのアトリエ「Kスタジオ」はある。

林を切り拓いて築かれた一本道の両側には、Kスタジオのほか鉄工所に木工所、自動車修理工場が見える。背後には幾重も稜線が連なり、ここからだと湖面は見えないが一碧湖も近くで水を湛えているはず。



アトリエへと向かう道中



アトリエへと向かう道中

山に囲まれ自然が豊かに残る土地であることは、生まれ故郷であり個展を開催している岩手と同じ。ただ、景観や自然のありようはどことなく違う気がする。

「植生がまったく変わりますからね。このあたりは針葉樹が多くて、冬場は葉が一斉に落ちる代わりに、春になると一帯がぱっと鮮やかな色合いになる。季節がはっきり感じられるというのは、まあ気持ちいいことですよ」。

木や石などを作品に用いることの多い菅さんにとって、アトリエ周りの自然はいわば素材の宝庫。ひよっとすると植生や地質には並々ならぬこだわりがある？

「いえまったく。自然がないと困るけれど、その性質や種類は創るものに何ら影響はありませんね。僕の場合、この素材はヒノキじゃないといけない、こっちは御影石でなければ、なんてことは一切ありませんから。

ただしそういう木の種別じゃなくて、もののありようとして、今度はこういう木の枝がほしいなといったイメージはつねにあります。次の作品にあったい枝ぶりのものを見つければ、小さいノコギリ持って行って切り出して、山から拝借するんです。最近はこの界限もこれで家が増えてきて、以前ほど自由に枝を見繕えなくてちょっと困ってます。

いつもそんなことを考えてウロウロしているから、もうだいたいどこに何があるかはわかってるんですよ。そうだ今度はあの枝を使おうかな、それまではあそこにそのまま生やしておこうか、といった調子で。もうね、いまや一帯が自分の庭みたいなもんですよ」。



アトリエ周辺は自然豊かだ

ではやはり、この地にスタジオがあることは、菅さんの創作にとって重要な意味を持つということになるのか。

「人間がうろうろしている空間よりも、こういう場所のほうが遥かに好きなので、自然のなかにいられることは大事ですね。どうしてもこの土地じゃなくちゃいけないわけではなかったけれど。

30年ほど前ここにスタジオをつくったのも、土地が安いというだけで決めました。温泉地だったのは幸いなこと。家にもひいてあり、毎日温泉に浸かれる。心身とも丈夫でいられるのはそのおかげでしょう」。



Kスタジオ

近所は自動車修理場や鉄工所だから、制作で大きな音を出しても気兼ねせずに済む。周りには、アーティストであることを知られている？

「いや、よくわかってないんじゃないかな。ここで何やってるの？と訊かれることはあるけど、木を使って色々やってるんだよと言えば、それ以上詮索もされません。

思えばいい環境ですよ。人の世界と隔絶しているわけじゃないが、ほどよく自然にまみれて、人間の言葉や思考性をちょっとうしろに置いておけるわけで」。



そう言われて改めてここの環境を見渡せば、なんとも穏やかで豊かな土地に思える。優しい日本の自然の典型、といった趣。

こういう場に身を置いていると、ひとつ疑問が浮かんでくる。自然が織り成す光景は圧倒的に美しく魅惑的で、ほかにまさるものはない。どんな作品もこれには敵わないという気がしてくるけれど、創作者としてはどんな心境か。

「そうですね、自然の存在はとてつもなく大きいですし、言わんとすることはよくわかります。が、ひとつ前提が僕とは違う気もするな。そもそも自然にまさろうとは思っていないのでね。むしろ、どこまで自然と人間が融和できるか、彼我の区別なくいられるかということをやっているつもりです。

僕は岩手の大きい自然のなかで生まれ育って、起きてから寝るまで自然のものばかり眺めて暮らしていた。すると自然はすっかり体内化してくる。対立的になんてならず、自然に対して融和的になる。その感覚が根本にありますね。

ものつくるとき木を使うにしても、対抗するように用いることはない。自分の気持ちの中に木が馴染み入り込んでくる感覚とでもいうのかな。自分と木が互いに引き寄せ合う状態になればいいと思っています」。



Kスタジオ内部

俗っぽく言ってしまうと、自然と対話しながらつくるといふことか。

「僕は自然が体内化しているから、自然をとらえるというのを無意識にやってしまうけど、それをある程度まで意識にしていけるのが、ものをつくるということなのでしょう。

体内化しているとはいえ、自然が人間とまったく同じとは思わないのでね。やっぱり付き合い方というものはある。人だっていろんな性格があって性質もそれぞれ違うように、木にもいろんなヤツがいて、一本ずつみんな違う。特徴をよく知って、記憶しておかないと。

さらにはその木が生えている周囲の自然、土地柄も含めて頭のなかにファイリングしておく。そうして初めて、あれはあの作品のここで使えるなといった勘が働くようになってくる。思考を働かせることで、より素材と密着できるようにしていくわけです」



Kスタジオ内部

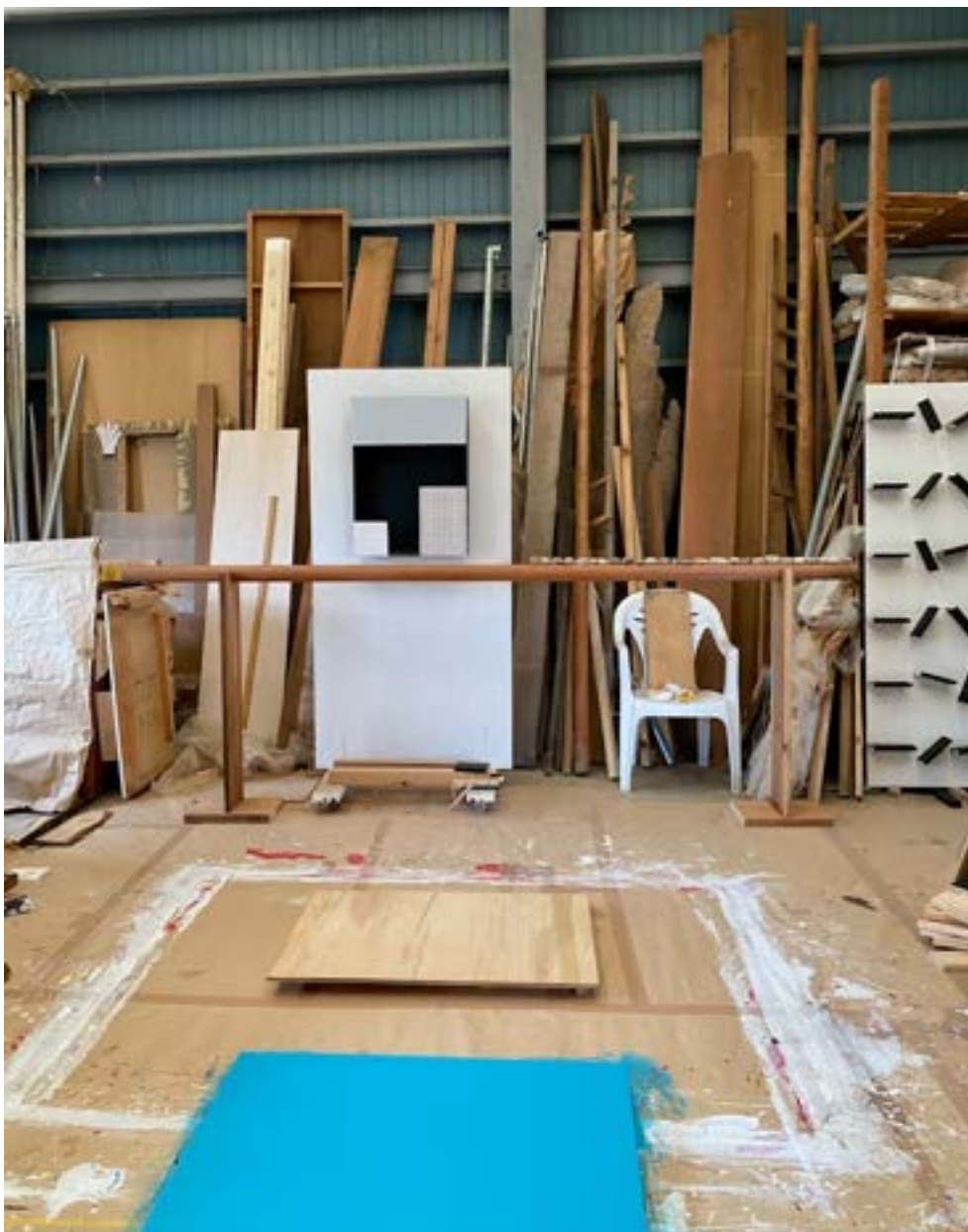
そのために日々のリサーチは欠かせない？

「そんな大仰なことかどうかはともかくとして、散歩は日課です。散歩とは自分の身体が空間を横切り伝っていくこと。移動につれて、同じものでも見え方が違ってくる。その変化をよく把握するのが大事。動く自分とそこにあるものとの関係を多面的にとらえるということがね」。

さらには、ものを並列的に受け入れることも重要なのだと菅さんは言う。「この地点が散歩の道中で最高のビューポイント」「この枝ぶりがいちばんきれいだ」といった意味づけや価値判断はしないのである。

「ものに意味をくっつける必要なんてないですよ。むしろ僕は意味から遠く離れようとしている。そうしてただ、異なるたくさんの視線があると実感していけばいい。

それから、つながりを確認することも大事ですね。木は独立してただそこにあるわけじゃなくて、必ず生えている地面があるでしょう。その地面にしても凸凹だったり藪だったり海岸だったりと色々だし、さらにはそうしたいろんな地形を生む風土や気候もまたさまざま。そういう多様性を認識しないとね。一本の木は、周囲のあらゆるものとつながって、そこにあるのだから」



Kスタジオ内部

たくさんの視点を持ち、あらゆるところに着眼点を見出す。そうして世界の見方を、ちょっと変えてしまう。それが菅さんのいう「ものをつくる」という行為のよう。

「そうやって豊かに世界をとらえることが、人間性の豊かさにまでつながっていくと僕は思ってますよ。」

作品を観る側としても、感得する面が大いにありではないか。「平凡な場所で生きてる私」「何も変わらぬ冴えない毎日」「取るに足らない自分の人生」などと塞ぎ込んでいる暇があったら、菅作品に倣って、世界の見方の転換を図ってみるのがいい。

外界をどうとらえたか。それを示すために、ものをすこし動かしたり、異質なものを並べて関係を生じさせたり、枠で囲ってみたりする。それが菅作品で為されていることだ。

ここでアーティストがしているのは、ほんのちょっとしたことである。アーティストとは無から有を生み出す存在であり、何やら魔術めいたすごいことをしているのかと勝手に想像しがちだが、じつはそうでもないのだろうか？

「たしかにつくる側ができるのは、つま先をちょっと動かす程度の『ちょぼっ』としたことだけです。そもそも僕はつくることで自然の全体をつくり変えようとか、ものの存在を変容させようといった大仰なことは考えていませんね。アートというのは、あるものを認める。それだけのことなんだと、ずっと言っています。」

でもいっぽうで、自分の『ちょぼっ』とした行為が、とてつもないものを引きずり出す可能性はあると信じている。素材となる自然のほうは、膨大なバックグラウンドを背負っていますからね。その大きなものに働きかけていれば、何かを引き起こせるかもしれない」



Kスタジオ内部

菅作品はそうした大きな効果を引き出すために、ささやかながらものにも働きかけを続けているということか。

「田舎に行くと、丸太を組んで納屋が築かれていて、木の枝でうまいこと丸太を支えていたりするでしょう？刈り取った稲束を乾燥させるのに、田んぼのなかに棒を組んでうまく引っかけてあったりとか。そこらにあるものを知恵と工夫で活用していて、見事なものだなと感心します。あれもたいへん創造的な行為。彼らはアートだなんて思ってやっていやしないだろうけど。」

僕がものをつくる行為は、あれに近い感覚です。日常のなかに、アートへ転換できる動作、行為、状態はいくらでもある。まっすぐにもものを見て、それがどういう状態であるか認識できたら、『じゃあこれを石ころで置き換えてみたらどうか』『枝だけ取り出してみるとどうなるか』などちょぼっとしたことをしてみる。そうやって類推、推測、観念の拡大などをし、一つひとつの現象を検証していく。それが作品の重要な要素となっていくわけです」



Kスタジオ内部

アーティストとは、人に「ある視点」を与える先導者のようなものだとも言う。

「どこかの山中に穴蔵があったら、そこに率先して入っていき、内部のことを皆にも見えるようにする者。アーティストという僕には、そんなイメージがあります。穴蔵が大きいのか狭いのか、内側の壁はどんななのか、外側とはどうつながって関係しているのか、アーティストはみずから見に行く存在です。さらには内側を探索するだけでなく、ときに穴から出て俯瞰する位置にまで浮かび上がり、全体像を把握したりもする。ときに奥深くへ潜り、ときには最も客観的な視点も持つ、自在に世界に対して出入りできるのがアーティストの持っている力ですよ。

僕の場合は、石ころや木の切れっ端なんかといかにして対等に、同次元に存在する視点を持てるかが、興味の対象になっているというわけです。そうしてものに対してリアリティを感じられれば、人間や自分の生にもリアリティを感じられようになるんじゃないかと思うから。

ものも人も、いまはどんなに大きく立派だとしても、最終的には無に帰するのが定めでしょう。ならばせめて、無に向かっていく過程に意識を傾け存在を認め、リアリティを感じたいじゃないですか。ものを認識するための有効な方策がアートだと僕は信じてきたし、これからもその考えも変わらない。だから今日も明日も、ここらを散歩したりスタジオに足を運び続けるでしょうね」。

この連載記事一覧

Profile

すが・きしお

1944年岩手県生まれ。李禹煥や関根伸夫などとともに「もの派」を代表するアーティスト。木や石、金属などの自然物・人工素材を、加工せずに空間に配置し、そこで生まれる光景を「状況（景）」と呼んで作品化してきた。73年からは、観客の前ですでに設置されたものを新たに置きかえて作品化し、空間を活性化させる「アクティベーション」と呼ぶ行為を展開してきた。これまで数多くの個展・グループ展に参加してきたが、2012年ロサンゼルスBlum & Poeで行われた「太陽へのレクイエム：もの派の美術」への参加をきっかけに、アメリカにおける再評価の機運が高まった。その後、同年ニューヨーク近代美術館で開催された「Tokyo 1955-1970: A New Avant-Garde」に参加。16年にはイタリア・ミラノのピレリ・ハンガーピコッカで大規模個展「Situations」が開催され、17年の第57回ヴェネチア・ビエンナーレ「VIVA ARTE VIVA」にも出展作家として参加した。08年、栃木県那須塩原市に菅の作品を常時展示するスペース「菅木志雄 倉庫美術館」が開館。16年、毎日芸術賞受賞。

編集部

あわせて読みたい